KEYSTONE AI TECHNOLOGIES

CUSTOM AI SOLUTIONS

あなたの会社に、専属のAIを。

DXの差は、「どこまで自社化できるか」。



専属シェフのように、一社一社のために仕立てる。

好みや健康状態に合わせて料理を作るように、
御社の仕事の進め方、課題、使う人に合わせてAIを設計。
多様な技術から選び、既存のシステムとつなぎ、
御社ならではの「働くAI」へと仕立てます。



汎用型は、豊富なメニューから選ぶ
フードコートのような便利さ。

SaaS × カスタムAI

今あるサービスを、御社仕様へ。

自社特化型AIエージェント

仕事の流れを、実行まで支援。

写真はサービスの考え方を伝える実写風イメージ（AI生成）です。

違いを知ると、選び方が変わる。

SaaSは、インターネット経由で使う業務ソフト。AIエージェントは、
目的に応じてツールを使い、仕事を進める仕組みです。両者は組み合わせて使えます。

SaaSとAIエージェントの役割

比較項目	従来型SaaSの基本像	AIエージェントの基本像
主な役割	情報を記録・管理する	目的に向けて業務を進める
使い方	人が画面で入力・操作する	人が目的と任せる範囲を伝える
業務の連携	設定した手順でつなぐ	状況に応じてツールを選び、つなぐ
得られる価値	管理のしやすさ・作業の効率化	情報収集から処理・報告までの支援

※役割を理解するための整理です。AIやエージェント機能を備えるSaaSもあり、機能は重なります。

大切なのは、自社に合わせる深さ

比較項目	汎用型をそのまま使う	自社特化型へカスタムする
合わせ方	標準機能に業務を合わせる	業務に合わせて機能・手順を設計
知識・データ	一般知識や標準設定が中心	社内規定・商品情報・履歴を活用
システム接続	用意された連携を使う	既存SaaS・社内DB・機器へ接続
得意な場面	要約・下書きなど共通の作業	独自の判断条件を含む一連の業務
導入と運用	始めやすい／標準仕様に依存	設計・検証が必要／変更にも対応

御社に合う仕組みを、今ある資産から。

汎用型にも適した用途があります。私たちは、既存SaaSや汎用AIの基盤を活かしながら、
自社のデータ・手順・権限まで組み込む「自社特化型」を推奨します。

AIは、ひとつの種類ではありません。

文章、画像、音声、数値予測。それぞれに得意なAIがあります。
ひとつ・ふたつの製品に限定せず、業務・体制・予算に合うモデルと技術を選定。
必要なものを組み合わせ、会社全体で使える仕組みをつくります。

言葉を理解する
言語AI／LLM

問い合わせの分類、要約、回答案の作成

社内の知識を探す
知識検索／RAG

社内規定やマニュアルを検索して参照

画像や書類を読む
画像認識／OCR

伝票の文字読み取り、画像の確認支援

聞く・話す
音声認識・音声合成

音声での受付、文字起こし、読み上げ

数値の先を予測する
機械学習／時系列AI

需要・売上予測、異常の兆候の検知

表現をつくる
画像・動画・文章の生成AI

販促素材や説明コンテンツの制作支援

仕事を進める
AIエージェント／業務自動化

情報照合から処理、通知までを連携

現場や機器につなぐ
エッジAI／IoT・ロボティクス

端末やセンサーと連携した現場の支援

選ぶのは、モデルだけではありません。

精度・速度・費用・情報の扱い・保守体制を見て、構成を決めます。
動かす場所も、クラウド／社内サーバー／現場端末から選定。
社内資料の検索、既存システムとの接続、必要に応じた追加学習を組み合わせます。

会社の変化に合わせて、モデルや構成も見直せる設計へ。

14 技術領域　**25** 分類　**410** 掲載項目

対応表に整理した、分野を横断する知見と利用経験を選定・設計に活かします。

出典：弊社アーキテクチャ対応表一覧（2026年9月28日）。410は重複を含む技術・ツール等の掲載項目数です。
RAGは社内資料などを検索して回答に活かす仕組みです。表にはAIモデルのほか、連携・運用技術も含みます。

「答えるAI」から、業務を進めるAIへ。

自社特化型なら、社内の情報と業務システムをつなぎ、実行まで支援できます。
人が確認する場面も含めて設計し、仕事の流れ全体を整えます。

活用イメージ：返品対応をひとつの流れに

01 受け付け
問い合わせを読み、要件を整理

→

02 照合する
購入履歴・返品規定・受領状況を確認

→

03 実行する
承認済みの条件で返金・在庫更新

→

04 記録・報告
対応結果を保存し、担当者へ通知

例外・高額案件は、担当者が確認・承認

※設計例です。自動化の範囲は、接続先の仕様・権限・社内ルールに合わせて設定します。

小さく始めて、使える形に育てる。

1. **業務を知る**
課題・体制・手順を整理

2. **選び、設計する**
AI・接続・確認条件を設計

3. **試して確かめる**
実データで精度・費用を評価

4. **運用を育てる**
効果を測り、継続的に改善

任せる範囲と、人が担う判断を明確に。

アクセス権限・操作記録・例外時の引き継ぎまで、運用に合わせて組み込みます。

御社の仕事に合うAIを、一緒につくる。

SaaSのAIカスタムから、自社特化型AIエージェントまで。

Keystone AI Technologies keystone-ai.jp

技術整理の参考：Anthropic「Building Effective AI Agents」／Microsoft Learn「Extend the capabilities of your agent」
参照日：2026年9月29日 | 自社技術の整理：弊社アーキテクチャ対応表一覧（2026年9月28日）